

前橋市立図書館 令和7年度 企画展示

時代を走り、書き、伝える

—昭和から今を見つめて—

前橋市立図書館 令和7年度 企画展示

時代を走り、書き、伝える

—昭和から今を見つめて—

会期 令和7年8月5日(火)～11月30日(日)
第1期 8月5日(火)～9月23日(火・祝)
第2期 10月7日(火)～11月30日(日)

編集 前橋市立図書館
前橋市大手町二丁目12-9
TEL 027-224-4311
MAIL library@city.maebashi.gunma.jp

企画・展示 松村紗希 吉澤真由 野澤雅子 若井苗

ごあいさつ	… 2
第1章 図書館	
昭和以前の図書館界の概観	… 3
戦前の図書館界	… 7
戦中の図書館(前橋市立図書館を中心に)	… 10
第2章 文学	
近代詩のふるさとまえばし	… 15
前橋ゆかりの詩人と戦争	… 17
戦争に徴用された作家たちの活動	… 19
徴用されなかった作家たちの活動	… 21
第3章 スポーツ	
日本プロ野球のはじまり	… 23
戦時下のプロ野球	… 25
日本とオリンピック	… 27
相撲のはじまり	… 30
キュレーターが思うこと。	… 32
参考文献	… 33

『伊藤信吉著作集 第7巻』伊藤信吉／著 沖積舎 2003年

『室生犀星』伊藤信吉／著 集英社 2003年

『最新図書館用語大辞典』図書館用語辞典編集委員会／編 柏書房株式会社 2004年

『萩原朔太郎』三好達治／著 講談社 2006年

『スポーツの百科事典』田口貞義／編 丸善 2007年

『日本文化のかたち百科』小町谷朝生／編 丸善 2008年

『近代日本公共図書館年表 1867～2005』奥泉和久／編 日本図書館協会 2009年

『荒れ野の40年』リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー／[述] 岩波書店 2009年

『伊藤信吉論』東谷篤／著 2010年

『相撲大事典』金指基／原著 現代書館 2011年

『図書・図書館史 ライブラリー図書館情報学10』大串夏身・金沢みどり／監修 綿拔豊昭／著 学文社 2014年

『日本十進分類法 新訂10版 1 本表・補助表編』
もりきよし／原編 日本図書館協会分類委員会／改訂編集 日本図書館協会 2014年

『日本プロ野球80年史』ベースボール・マガジン社／編 ベースボール・マガジン社 2014年

『井伏鱒二と戦争』黒古一夫／著 彩流社 2014年

『昭和平成大相撲名力士100列伝』塩澤実信／著 北辰堂出版 2015年

『前橋市立図書館100年誌』前橋市立図書館／編 前橋市立図書館 2017年

『図書館人物事典』日本図書館文化史研究会／編 日外アソシエーツ株式会社 2017年

『日本目録規則 2018年版』日本図書館協会目録委員会／編 日本図書館協会 2018年

『図書館の日本史』新藤透／著 勉誠出版 2019年

『図書館情報学用語辞典 第5版』日本図書館情報学会用語辞典編集委員会／編 丸善出版 2020年

『図書館の日本文化史』高山正也／著 筑摩書房 2022年

『日本プロ野球の歴史』菅谷齋／著 大修館書店 2023年

- 『日本相撲史』横山健堂／著 富山房 1943年
- 『オリンピックと日本スポーツ史』日本体育協会／編集発行 1952年
- 『相撲今むかし』和歌森太郎／著 河出書房新社 1963年
- 『群馬県立図書館十年の歩み』群馬県立図書館／編 群馬県立図書館 1964年
- 『高村光太郎』伊藤信吉／著 角川書店 1964年
- 『群馬県図書館協会20年略誌』群馬県図書館協会／編 群馬県図書館協会 1972年
- 『群馬県教育史 第一巻 明治編上巻』群馬県教育史研究編さん委員会編さん事務局／編 群馬県教育委員会 1972年
- 『群馬県教育史 第二巻 明治編下巻』群馬県教育史研究編さん委員会編さん事務局／編 群馬県教育委員会 1973年
- 『私の詩的地帯』伊藤信吉／著 彌生書房 1973年
- 『群馬県教育史 第三巻 大正編』群馬県教育史研究編さん委員会編さん事務局／編 群馬県教育委員会 1974年
- 『群馬県教育史 第四巻 昭和編』群馬県教育史研究編さん委員会編さん事務局／編 群馬県教育委員会 1975年
- 『萩原朔太郎全集 第13巻』萩原朔太郎 筑摩書房 1977年
- 『日本スポーツ文化史』木村毅／著 ベースボール・マガジン社 1978年
- 『日本スポーツ50年史』ベースボール・マガジン社／編 ベースボール・マガジン社 1979年
- 『群馬県百科事典』上毛新聞社 1979年
- 『群馬県図書館協会30年誌』群馬県図書館協会／編 群馬県図書館協会 1982年
- 『国史大辞典 3』国史大辞典編集委員会／編 吉川弘文館 1983年
- 『新潮日本文学アルバム 8』新潮社 1984年
- 『前橋市史 第 5 巻』前橋市史編さん委員会／編 前橋市 1984年
- 『日本大百科全書 5』小学館 1985年
- 『前橋市立図書館70年小史』前橋市立図書館／編 前橋市立図書館 1986年
- 『目でみる昭和の大相撲(上)』景山忠弘／編・解説 国書刊行会 1986年
- 『図書館発達史』佐藤政孝／著 みずうみ書房 1986年
- 『最新スポーツ大事典』岸野雄三ほか／編 大修館書店 1987年
- 『萩原朔太郎研究会会報 第 1－38号』萩原朔太郎研究会 1987年
- 『伊勢崎市史 通史編 3 近現代』伊勢崎市／編 伊勢崎市 1991年
- 『群馬の図書館ガイド』群馬県図書館協会／編 群馬県図書館協会 1992年
- 『近代日本図書館の歩み 本篇－日本図書館協会創立百年記念』日本図書館協会／編 日本図書館協会 1993 年
- 『日本近代文学年表』小田切進／編 小学館 1993年
- 『図書館の歴史』寺田光孝・藤野幸雄／著 日外アソシエーツ株式会社 1994年
- 『日本文学の歴史 14』ドナルド・キーン／著 中央公論社 1996年
- 『前橋市立図書館80年小史』前橋市立図書館／編 前橋市立図書館 1997年
- 『市立図書館80年の歩み「前橋市立図書館80年小史」別冊』前橋市立図書館／編 前橋市立図書館 1997年
- 『時代別日本文学史事典 現代編』時代別日本文学史事典編集委員会／編 東京堂出版 1997年
- 『基本件名標目表 第 4 版』日本図書館協会件名標目委員会／編 日本図書館協会 1999年
- 『作家の自伝 90』佐伯彰一／監修 日本図書センター 1999年
- 『歩み続ける群馬の図書館－図書館協会創立50周年記念誌－』
- 群馬県図書館協会創立50周年記念誌編集委員会／編 群馬県図書館協会 2002年

ごあいさつ

2025年は第二次世界大戦の終戦から80年、もしも昭和時代が続いていたら100年目にあたる年です。時代の流れの中で人々の生活は豊かになり、様々なテクノロジーが発達したおかげで、世界との距離はぐっと近づきました。時にその量の多さに溺れそうになるほど情報で溢れる現代社会は、遙か遠い国で起こる出来事やその地域に住む人々との繋がりを身近に感じさせる一方で、多くの不安定な要素を抱えています。

「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります」と述べたのは、旧西ドイツ大統領・ヴァイツゼッカーでした。彼はこの演説から数年後、東西ドイツを分断していたベルリンの壁が崩壊する瞬間を迎え、統一されたドイツの大統領も務めました。しかし、歴史に刻まれた過去と、多くの反省と共に歩んできたはずの世界には、国境を分かち、民族の行き来を阻む74の分離壁が未だに存在していると2022年の研究で発表されています。

戦後80年、昭和100年を迎えるタイミングで開催する今回の企画展示は、時代を振り返るテーマとして、図書館活動・文学・スポーツの3つを据えました。それぞれの視点を軸に、日本にとっても大きな転換期を迎えることになった時代を辿ります。

私たちがこの先、世界中の人々と手を取り合い、お互いを尊重しながら生きていくために、過去に起きた暗く苦しい出来事への反省を無かったことにするような結末を迎えないために、この展示を通して来場者のみなさまと一緒に考え続けたいと思います。

前橋市立図書館

明治時代、文明開化とともに公共図書館においても近代化が図られました。昭和に入り世の中が戦争へと向かう中、そして戦時中という厳しい状況下でも、現場の図書館員たちの努力などによって図書館活動は絶えることなく続けられてきました。前橋市立図書館では、空襲のあった1945(昭和20)年8月5日よりわずか2日後に運営が再開されています。また、全国の図書館が資料の疎開を行ったことにより戦火から守られ、これによって今日私たちが目にすることができる貴重な資料も存在します。

ここでは、明治・大正期の公共図書館のあゆみから掘り起こし、昭和の戦前期・戦中期の日本の図書館界について、前橋市立図書館を中心に振り返ります。

昭和以前の図書館界の概観

明治期

1872(明治5)年、日本初の近代的な公立図書館である「書籍館」が文部省により東京の湯島に設置されました。これは数度の改称・所管替えを経て1897(明治30)年、帝国図書館となり、戦後現在の国立国会図書館に統合されています。同じ年、群馬県では碓氷郡安中町(現・安中市)において、湯浅治郎により「便覧舎」が開設されました。これが県内最初の図書館にあたります。群馬県の近代図書館活動のはじまりは、全国的に見ても早かったことがわかります。

翌年の1873(明治6)年、日本で最初の公共図書館とされる「集書院」(現在の京都府立図書館)が開設されました。その後は、1892(明治25)年に「日本文庫協会」※1の設立、さらに1899(明治32)年には国内初の図書館単独法規である「図書館令」が公布されたことで公共図書館に法的根拠が与えられ、これを機に図書館設立の機運が全国的に高まっていったといわれています。

当館とゆかりの深い「上野教育会附属図書館」は、1900(明治33)年5月に前橋市内に設立されました。上野教育会とは、群馬県下の教職員によって構成された教育振興団体です。「教育会」と銘打った団体は当時全国にありましたが、それらの中央機関として組織されたのが「大日本教育会」でした。1887(明治20)年、その大日本教育会により「大日本教育会書籍館」が設置されたことで、全国の教育会が図書館の設立に乗り出したといわれています。上野教育会では1896(明治29)年に県立図書館設置の要望を提出していましたが、実現には至らなかったため、教育会独自の図書館を開設することになりました。

※1 日本文庫協会：1908(明治41)年に日本図書館協会へ改組・改称

キュレーターが思うこと。

1985年5月8日、ドイツ連邦議会で旧西ドイツ大統領による演説が行われました。「多くの民族(フォルク)が本日、ヨーロッパの地で第二次世界大戦が終結を迎えたあの日を思い浮かべておりますが、どの民族も、自らの運命に応じ、それぞれ独自の感情をもっております。」という一節から始まるこの演説は、大統領が演説に臨むまでの準備に対する姿勢とその内容が称賛され、後世にも語り継がれています。

長い歴史の中では、何度も思い出したくなるような素晴らしい出来事も、影と反省を伴い、目をそむけたくなるような出来事も起こります。世界中に暮らす人々が、国籍や文化、人種、信仰などのあらゆる違いを超え、たったひとつの地球で手を取り合い、この先の時代を創っていくためには何が必要なのでしょう。

演説は、若い人たちへの願いを託す文章で結ばれます。戦後80年、昭和100年を迎えるこの節目の年に、今を生きる私達も改めて過去を胸に刻み、たくさんの希望(たとえそれが大きくても小さくても)と共にこれからの日々を過ごせることを願っています。

過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります
リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー

大横綱・双葉山

昭和初期は「昭和の角聖」と呼ばれた双葉山が活躍した時代でもありました。双葉山が連勝を続ける様子は、当時中国に侵攻して連戦連勝と伝えられていた日本軍と重ねられ、「英雄双葉山を一目見たい」と前日から国技館にファンが詰めかけました。この相撲人気に应运えて1923年以来11日間だった本場所が1937年5月から13日間、2年後の5月からは15日間になったのも大きな変化です。「双葉の前に双葉なく、双葉の後に双葉なし」の言葉が語るように、双葉山は「心・技・体」揃った大横綱といわれています。1939年に成し遂げた69連勝という大記録は今も破られていません。



歴代横綱手形
尾崎清風／編 歴代横綱手形刊行会 1942(昭和17)年

歴代横綱の手形を集め、編集された資料です。展示している箇所は、第35代横綱として前人未到の69連勝記録を打ち立てた力士・双葉山の手形が掲載されています。活躍を支えた大きな手のサイズは、手首から中指の先までが約21.5cm(手形実測)です。

上毛新聞

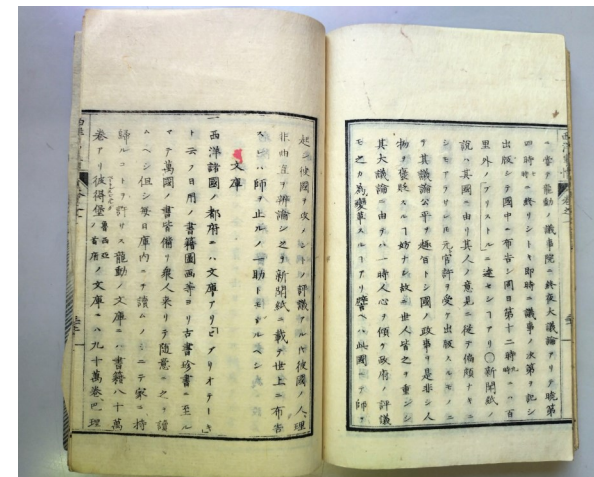
上毛新聞社 1939(昭和14)年1月17日

昭和の名力士・双葉山が70連勝記録を目前に敗れた記事が、上部約5段にわたり掲載されています。右上部分には記録が止まった取組の様子が詳細に記され、決着の瞬間は「大鐵傘下はたぎるルツボだ、狂喜乱舞、座布団がとび、酒瓶がとぶ」と表現されています。警官も出動するほどの大勝負は、人々を熱狂の渦に巻き込みました。

また、紙面には双葉山を破った力士・安芸の海のインタビューも掲載されていますが、あまりの盛り上がり、取組を冷静に振り返る内容にはなかったようです。勝利後に安芸の海の支度部屋へファンがなだれ込んだことや、家が壊されそうなほど人が押し寄せたことも記事になっていて、興奮冷めぬ人々の温度が感じられます。

西洋事情 初編

福沢諭吉／著 慶應義塾出版局 1873(明治6)年



西洋諸国の政治・歴史・文化・制度などを紹介したもので、幕末に福沢が遣欧・遣米使節団の一員として欧米に渡った際に得た見聞や外国書籍をもとに執筆されました。1866(慶応2)年から1870(明治3)年にかけて、初編3冊・外編3冊・二編4冊の計10冊の著作として刊行され、幕末・明治初頭の人々にとって新鮮な内容であったことから当時ベストセラーになったといわれています。

「文庫」の項には、欧米の図書館事情が記されています。これが、日本に最も早く西洋の近代図書館を紹介した記述だといわれており、図書館は「ビブリオテーキ」と表現されています。なお、「文庫」は「図書館」という言葉が日本で一般的になる以前に用いられていた名称です。

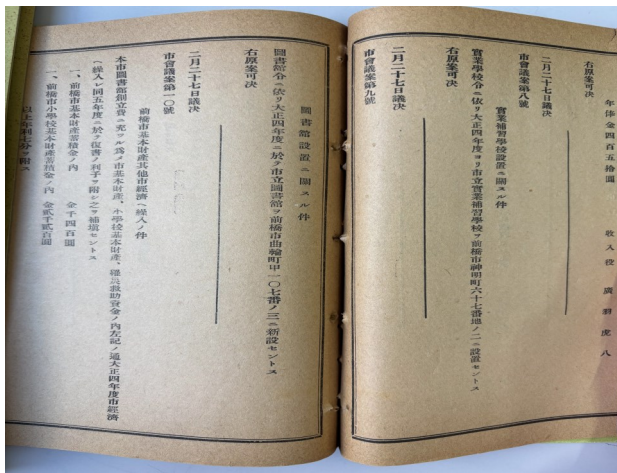
「図書館」になる前は・・・

今日「図書館」と称されている施設は、近代以前には「文庫」といわれ、明治に入ると「書籍館」と呼ばれていました。図書館が初めて法的に規定された1879(明治12)年の「教育令」でも、「書籍館」と表現されています。日本で初めて「図書館」という名称を用いたのは1877(明治10)年に開館した東京大学附属図書館だといわれており、明治時代の初期から中期頃までは、大学図書館では「図書館」が、一般向けの図書館では「書籍館」が主に使用されていました。

大正期

上野教育会附属図書館は1917(大正6)年に閉鎖されますが、同館が所蔵していた図書を引き継いだのが、1916(大正5)年4月に創立した前橋市立図書館です。当館は大正天皇御即位記念として1915(大正4)年2月の市議会で設置が議決され、曲輪町甲百七番地(現・大手町二丁目)に木造洋風二階建の施設として建設されました。県内最初の公立図書館である「神川村立凱旋記念図書館」(現・多野郡神流町)の開館より9年後のことでしたが、独立館として運営される本格的な公立図書館としては初のものでした。開館当時の蔵書冊数は3,152冊で、10年後の1926(大正15)年度末には31,194冊に、また閲覧者数も大正5年度では総数35,066人(一日平均146人)であったのが、大正15年度には90,406人(一日平均315人)となり、順調に発展していたことがうかがえます。大正期の市立図書館では、お伽学校(読み聞かせ会)の開催、館報の創刊、旧前橋藩主・松平家の古文書調査の実施、郷土資料の展示会、『群馬県人著述書目』の編集刊行などといった様々なサービスや事業を行っていました。

1923(大正12)年には、「群馬県図書館協会」が事務局を当館に置いて設立されました。戦前の県図書館協会は、改組・規約改正がたびたびあり、1945年に活動停止になっています。なお、都道府県単位での図書館協会の結成は、1909(明治42)年の「山口県図書館協会」が最初ですが、この設立に携わった佐野友三郎は前橋藩士の家の生まれです。



前橋市會決議録

相撲のはじまり

相撲の歴史

日本の伝統文化である相撲の歴史は古く、争うという意味の「すまう」が変化した「すまふ」が語源ともいわれています。古代より世界中で相撲に似たスポーツが行われていたことがわかっていて、日本でも弥生時代の土偶や古墳時代の埴輪で相撲の形態をしたものが出土しています。「古事記」や「日本書紀」にも力くらべの神話や伝説が記され、古くから人々のなじみのあるものでした。弥生時代には農耕儀礼として相撲をとるようになり、平安時代には宮中行事として相撲節会(すまいのせちえ)が行われ、戦国時代には相撲を愛好した織田信長が力士を集めて安土城などで上覧相撲を開催しています。江戸時代に入ると勧進相撲(かんじんずもう)が行われ、この時代に現在の相撲の形が作られたとされています。

国技としての相撲

江戸時代中期には定期的に勧進相撲が行われ、興行団体である「相撲会所(すもうかいしょ)」ができて、制度や組織が整備されました。試合に出場する力士を階級別に一覧にした番付が発行されるようになったのもこの頃です。明治時代になると相撲会所が「大角力協会」となり、1909年に東京・両国に国技館が設立され、国技として認識されるようになりました。1927年には東京と大坂の大角力協会が合併、大日本相撲協会(後の日本相撲協会)となって、1938年には大阪国技館も完成しました。また、アマチュアのスポーツ競技としても行われ、嘉納治五郎の呼びかけで学生相撲も盛んになりました。相撲が学校体育において正規の授業科目に取り入れられたことや、戦争が激化するにつれて外来スポーツが排除されるという風潮もあったことから大相撲は人気となります。



嘉納治五郎

教育家、講道館柔道の創始者。1860(万延元)年、摂津国菟原郡(うばらぐん)御影村(現・神戸市東灘区御影)生まれ。東京大学を卒業の後、学習院講師、同教授、同教頭、文部省普通学務局長、東京高等師範学校校長などを歴任したほか、清国留学生のために私財を投じて東京神田に亦楽(えきらく)書院(のちに弘文学院に発展)を創設し、その教育に尽力しました。

大学在学中から、虚弱な体質を克服して自らを鍛錬する手段として古流柔術に注目し、天神真楊流さらに起倒流を学びました。それらを基礎として新たに柔術を生み出して柔道とし、講道館を設立、指導したことで知られています。また、機会あるごとに外遊して柔道を海外に紹介した功績も大きく、広く体育やスポーツの振興にも貢献しています。

昭和に入ってからオリンピックの日本招致に情熱を傾け、IOCベルリン総会で4年後に行われる第12回東京大会開催の権利を獲得し、さらに1938年のIOCカイロ総会では冬季大会の札幌招致に成功しました。しかし、カイロからの帰途、肺炎を発病して船上で亡くなりました。



青年修養訓 嘉納治五郎／著 同文館 1915(大正4)年

『青年修養訓』は1910(明治43)年に初版が刊行され、若者たちの成長に必要な修養が記されています。「我が国の青年に告ぐ」から始まり、「注意力の修練」「多方面に注意を向けよ」「師に対する心得」など、50項目にわたって当時の時代思潮や外国思想に配慮しながら、あるべき人間像を若者たちに向けて説いています。

当館で所蔵しているのは1915年の第9版です。

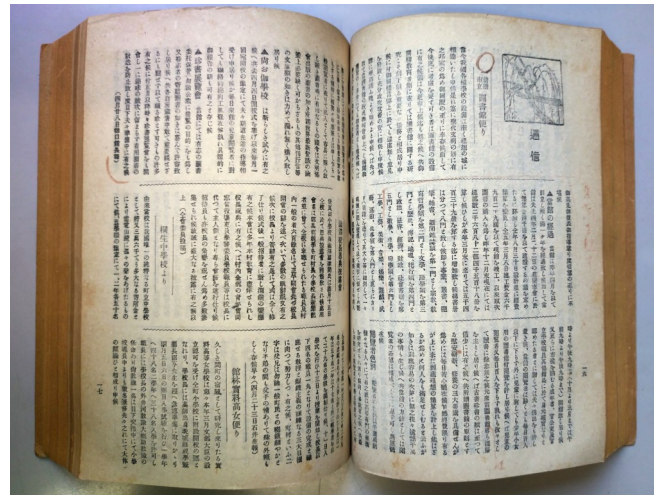
上毛新聞

上毛新聞社 1938(昭和13)年7月15日

夏季大会の開催が決定した2年後、大会中止の報道がされました。同時期に行われる予定だった万国博覧会(万博)の延期も報道され、結果的に2つのイベントはどちらも開催されることなく、幻となりました。中止の要因は日中戦争の影響が大きかったと考えられます。新聞記事は「五輪大会は中止 政府の方針既に決定」と内容を伝え、開催決定の知らせと比較するとあっさりとした印象を受けます。

前橋市立図書館便り

樋口千代松／著 上野教育会 1917(大正6)年



当時の樋口館長による、開館1周年の当館の現況についての報告で、上野教育会の機関誌『上野教育』に掲載されたものです。

これによると、当時は図書を8つのジャンルに分けて整理し、閲覧料は無料、開館時間は午前8時～午後9時(10月～3月は午前9時～午後9時)、条件を満たす一部の利用者に貸出を許可していたことがわかります。また、児童書に関しては「図書備付閲覧」を実施していたとありますが、これは開架式(利用者が直接棚から図書を取り出せる方式)の本棚を採用していたことを示しています。当時の図書館は閉架式(利用者の請求により図書館員が書庫から出納する方式)が主流で、利用者は実物を見て図書を選ぶことができませんでした。

図書館の閲覧料が無料であることは、戦前の図書館法規が料金徴収を許可していたこともあって、当時としては当たり前のことではありませんでした。図書館に無料公開の原則ができるのは、戦後の1950(昭和25)年に制定された現行の「図書館法」によります。当館は、1946(昭和21)年4月から図書館法施行に至るまでの期間を除き、無料で運営されていました。

図書目録 第一輯

前橋市立図書館／編集発行 1920(大正9)年



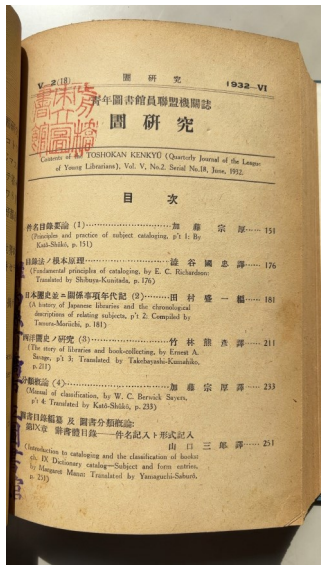
児童書を除く、1920(大正9)年末時点での当館の蔵書一覧です。

戦前の図書館界

昭和初期の図書館界の主な動きとして、まず1927(昭和2)年の「青年図書館員聯盟」の発足が挙げられます。これは関西の若手図書館員を中心に結成された団体で、1943(昭和18)年に解散となりましたが、『日本十進分類法』(森清、1929(昭和4)年)、『日本件名標目表』(加藤宗厚、1930(昭和5)年。現・『基本件名標目表』)、『日本目録規則』(1942(昭和17)年)といった、現在でも国内の図書館で広く採用されている規則を考案・刊行するなど、後の図書館界に及ぼした影響は計り知れないものがありました。同聯盟の機関誌『図書館研究』には、1943年から約23年間、当館の館長を務めた渋谷国忠も寄稿しています。

目録法ノ根本原理

E.C.Richardson／著 渋谷国忠／訳 青年図書館員聯盟 1932(昭和7)年



青年図書館員聯盟により、1928(昭和3)年に創刊された機関誌『図書館研究』に掲載されたもの。第7代館長・渋谷国忠が横浜市立図書館司書時代に執筆したもので、アメリカ図書館協会会長を務めたこともあるアーネスト・クッシング・リチャードソン(1860-1939)の研究の翻訳です。目録とは、図書等の個別データ(タイトル・著者名・出版社等)にその所在情報を加えた資料一覧のことです。

その後、嘉納治五郎の尽力もあって1936(昭和11)年のIOCベルリン総会では第12回大会を東京で開催する権利を獲得し、組織委員会を発足、更には同年の第5回冬季大会を札幌で開催する権利も獲得しました。しかし、東京での開催権獲得の翌年に日中戦争が勃発すると、戦争は拡大して長期化の一途をたどり、組織委員会は大会中止の決定を余儀なくされました。

上毛新聞

上毛新聞社 1936(昭和11)年8月2日

第12回国際オリンピック夏季大会の開催地が東京に決定したことを知らせる記事で、見出しに「吾等の待望実現」とあるように、国民が大会に大きな期待を寄せていたことが分かります。右上の記事では、決定の経緯のほか、この大会が国民体育の向上、国民性の良い所を全世界に発信する好機であるといった内容が書かれています。

その他、開催される競技とそれに必要な施設の用意が必要だと書いた左上の記事には、「用意はいいぞ 早くも具体案決定」という見出しで、吉報と共に大会招致計画委員会に緊張が走ったという内容がみられます。国民の期待を背負った一大イベントへのプレッシャーは、現代もこの当時も変わらないのかもしれません。

また、大会にあわせて来日する選手や観光客を迎え入れるためのホテルについても言及され、「ホテルの心配全然無用」という記事も掲載されています。

日本とオリンピック

オリンピックの起源

古代ギリシアのオリンピアでは紀元前776年より約1,200年にわたって「オリンピア競技祭」を4年に1度開催していました。その競技祭では訪れる人々の安全を保証するために、競技期間中とその前後1ヵ月の間、ギリシア中のあらゆる戦いが休止され、武器を持ち込むことや、死刑、争いを禁じるという協定が結ばれていました。これは、一時的なものではありますが平和を保つために重要な役割があったとされています。その競技祭を近代オリンピック大会として19世紀の末に復活させたのがフランスの教育家であるピエール・ド・クーベルタン(1863－1937)です。クーベルタンはこのような大会を復活させることによってスポーツを通じて国際交流の機会が生まれ、世界の平和に貢献することができるのではないかと考え、1894(明治27)年にIOC(国際オリンピック委員会)を創設し、1896年に第1回オリンピック大会をギリシアのアテネで開催することに成功しました。

オリンピック参加までの道のり

日本がオリンピック大会に参加する契機となったのは、1909年に駐日フランス大使オーガスト・ジェラルールがクーベルタンより依頼を受け、当時の東京師範学校(現・筑波大学)校長の嘉納治五郎に会見を申し込んだことに始まります。その年のうちに嘉納治五郎が東洋で初めてIOC委員に任命され、第5回ストックホルム大会への日本人選手派遣が要請されました。参加するためには日本オリンピック委員会(JOC)を設立しなければならなかったため、1911(明治44)年に参加の母体となる「大日本体育協会」(後の日本体育協会、現・日本スポーツ協会)が設立され、初代会長に嘉納治五郎が就任します。この第5回ストックホルム大会の団長も嘉納治五郎が務め、監督に大森兵蔵、選手は三島弥彦と金栗四三の4名が参加しました。

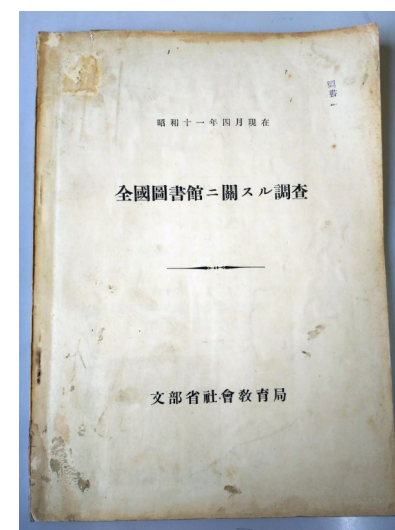
1933(昭和8)年には、「図書館令」が改正公布されました。その第1条第1項には「図書館ハ図書記録ノ類ヲ蒐集保存シテ公衆ノ閲覧ニ供シ其ノ教養及學術研究ニ資スルヲ以テ目的トス」とあり、図書館の目的が初めて明示されました。また第10条第1項において、各県の公立図書館のうち1館を「中央図書館」に指定し、県内図書館に対する指導的役割やネットワーク網の中心として機能させることが定められました。群馬県では、当時県立図書館がなかったことなどもあって指定までに紆余曲折があり、1943年に当館がその任を請け負うことになりました。県内一円を対象にした貸出文庫※2の設置や読書会の組織などを行い、1951(昭和26)年に現行の図書館法が施行されるまで、当館は群馬県の中核図書館としての役割を果たしていました。

『県下公立図書館設置ノ状況』という資料には、1932(昭和7)年に群馬県が実施した県内の図書館状況調査の結果が報告されています。これによると、公立図書館29館、私立図書館143館の計172館が設立されており、総蔵書冊数135,613冊、閲覧者数691,915人、館員471名などと記録されています。前橋市立図書館単館では、蔵書冊数39,322冊、閲覧者数190,688人、館員8名となっています。

※2 貸出文庫：図書館未設置自治体や図書館が遠く日常的に利用できない地域に対して行われる図書館サービスの一種。通常、図書館が、地域の公共施設や各種団体にまとまった冊数の図書を一定期間預け、そこから近隣の住民が本を借りることができるようにするものである。(『図書館情報学用語辞典』)

全国図書館ニ関スル調査

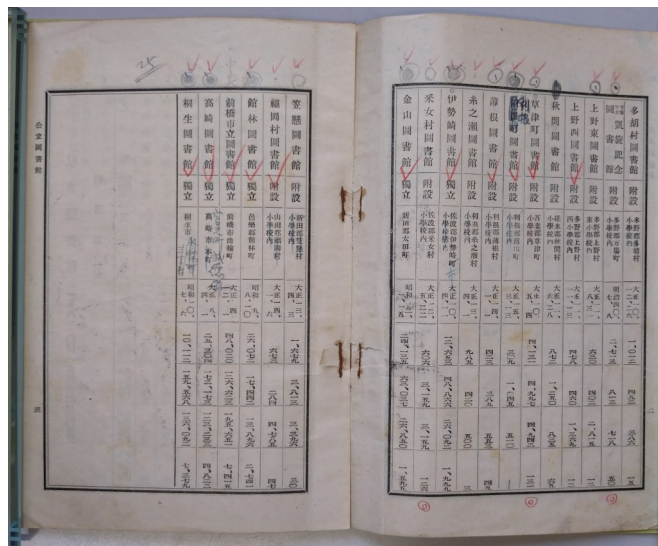
文部省社会教育局／編・発行 1936(昭和11)年



文部省による、全国の公立・私立図書館の蔵書・経費・職員などに関する調査結果をまとめた資料。都道府県ごとの総数と、主要図書館ごとの個別統計とが掲載されています。「附」として当時日本領であった朝鮮・台湾・樺太・関東州の統計もあります。

図書館概況並関係法規

群馬県社会教育課／編・発行 1938(昭和13)年



1937(昭和12)年4月1日現在の群馬県内の図書館概況記録資料。公立図書館全25館、私立図書館全158館、それぞれの館について「館舎独立附設ノ別」「所在地」「設置年月日」「蔵書冊数」「前年度閲覧冊数」「前年度閲覧人員」「本年度総経費」が報告されています。

戦前の図書館は、全国的な傾向として、独立して運営されていた館は一部に留まっていた。大多数は青年団などを母体として小学校等に併設され、蔵書冊数や閲覧者数なども小規模な零細図書館にあたりました。この調査においても、公立図書館25館のうち、独立図書館は6館のみです。



前橋市立図書館初代館舎

上毛新聞

上毛新聞社 1934(昭和9)年11月14日

この年、日米大野球戦が開催されました。ホームラン王になっていたベーブ・ルースも来日し、当時高校生投手として活躍していた沢村栄治と対戦しています。試合は東京都の神宮球場などで計18試合が行われ、多くの観客が球場に足を運び、スター選手のプレーに熱狂しました。

ちょうど同時期、群馬県では陸軍特別大演習が行われていたこともあり、上毛新聞には試合や選手の様子を伝える記事はほぼ掲載されませんでした。関連の情報といえば、東京電気株式会社のラジオ受信用マツダ真空管広告にベーブ・ルースの姿があるのみで、列島の盛り上がりとは一味違う、群馬県内の世相がよく分かります。

英語から日本語表記へ

1943年、それまで使われていた野球に関する用語は、陸軍報道部の指示により英語を日本語表記にして使用することになりました。

全般の用語

リーグ戦 ⇒ 総当戦
マネージャー ⇒ 幹事
ホームゲーム ⇒ 迎戦組
フェアグラウンド ⇒ 正打区域

コーチ ⇒ 監督
チーム ⇒ 球団
コッチャーズボックス ⇒ 助令区域
ファウルライン ⇒ 境界線

ルールの用語

プレーボール ⇒ 試合始め
ワンストライク ⇒ よし一本
三振アウト ⇒ それまで

ゲームセット ⇒ 試合終わり
セーフ ⇒ 安全、よし
アウト ⇒ 無為、ひけ

戦時下のプロ野球

公式戦を続けたプロ野球

プロ野球に戦時色が強くなってきたのは1937年頃からで、選手にも召集令状が届き、軍隊に駆り出されるようになります。1940年頃から軍部当局の監視も厳しくなり、野球が親米的なスポーツであるという声に配慮して連盟は「国民運動に協力する」という姿勢で新綱領を発表しました。新綱領の中にはユニフォームの文字や球団旗などを日本字にし、試合中の選手・審判員・場内放送を日本語にする、また、球団名や審判の判定も日本語化されて英語が禁止されることが含まれました。

1943年には東京六大学や都市対抗野球などは中止されていましたが、プロ野球だけは「選手は全員を”軍需要員”として産業に従事しながら試合をする」という方針を打ち出して公式戦を続行しました。野球用具の粗悪化が進む中、選手は野球帽ではなく戦闘帽をかぶり、ユニフォームは国防色にするほか、試合前に選手による手榴弾投げが行われることもありました。

ますます戦局が泥沼化していた1944年には、日本野球連盟から「日本野球報国会」に名称変更します。関係者の努力によって続けられていた公式戦は、次々と選手が戦地に駆り出されたことでいよいよチーム編成ができなくなり、公式戦中止を宣言する事態へと発展しました。

戦火に散ったスター

「伝説の一戦」として記録に残る、1934年のアメリカ・大リーグ選抜チームとの対戦では、当時17歳の投手・沢村栄治が大活躍しました。ベーブ・ルースから三振を奪い、後にプロ野球史上初のノーヒットノーランを達成して観客を魅了した沢村も、1944年には戦地に向かっています。その道中、乗船していた護送船が攻撃され、27歳の若さで命を落としました。沢村をはじめ、超一流の二刀流といわれた景浦将(かげうらまさる)や「花の昭和13年組」と呼ばれて将来を囑望されていた吉原正喜など、多くの選手を戦争で失っています。

戦火に散ったプロ野球選手の名前は、東京ドーム敷地内に設置された「鎮魂の碑」にその名が刻まれています。

戦中の図書館(前橋市立図書館を中心に)

渋谷館長の「事務日誌」

第7代館長・渋谷国忠は、1943年9月30日に館長に就任しました。渋谷館長は大学卒業後に横浜市立図書館に就職、以降生涯を図書館業務に捧げるとともに、戦後は萩原朔太郎研究家としても活躍しています。当館には、渋谷館長による1945年1月1日から1947(昭和22)年9月26日までの「事務日誌」が残されており、戦争末期から戦後初期にかけての市立図書館、および県内の図書館の動向を現在に伝えています。

戦局が苛烈を極めるにしたがって、東京の図書館で進められていた資料の疎開作業が、昭和20年頃から群馬県でも始まりました。当館では、3月7日に前橋藩松平大和守家記録^{※3}の疎開を市に対して相談しており、4月23日の「事務日誌」には「旧藩記録全部ヲ左記ニ運搬疎開ス」と記され、下川淵村亀里(現・前橋市亀里町)に疎開したことがわかります。この疎開により戦災を免れた松平大和守家記録は今日まで伝わり、江戸期の前橋を知る上で第一級の史料として、現在は群馬県指定重要文化財に登録されています。その他の重要な図書に関しても3月中に疎開が行われるとともに、7月になるとさらに利用の多い図書や物品類を館長の自宅に疎開させていますが、こちらは前橋空襲で館長宅が全焼したことにより失われてしまいました。

館舎の接収・徴用に伴う図書館機能の移転があったことも「事務日誌」には記録されています。まず3月8日に前橋地区憲兵隊による図書館舎使用について打診があり、同26日には臨江閣別館に移転が決定・作業を開始しています。移転作業がすべて終了したのが4月4日でしたが、わずか2日後の6日付で今度は臨江閣を連隊区司令部庁舎として使用することとなり、翌7日に図書館は桃井国民学校(現・前橋市立桃井小学校)への移転が決定、再びの引っ越し作業を余儀なくされました。桃井校の児童生徒、司令部兵士、市の工夫らの協力のもと、11日には図書等の運搬作業がすべて終了、以降の館内整理においても桃井校生の尽力があり、5月1日になってようやく開館までこぎつけています。

※3 前橋藩松平大和守家記録：江戸時代の前橋藩主であった松平大和守家による、1698(元禄11)年から1877年にかけての約180年間の記録で、1928年に市立図書館に寄託されていたもの。戦後、正式に図書館の所蔵資料となりました。

そして、1945年8月5日日曜日。前橋空襲が起きたこの日、渋谷館長は関東地方戦時図書館事業協議会に出席しています。これは文部省・大日本図書館協会主催のもと、群馬県中央図書館として当館が協力し、群馬県を主催県として開催された会です。東京都日比谷図書館長・中田邦造や帝国図書館長・松本喜一といった著名な図書館員のほか、関東地方の図書館関係者が出席しています。一泊二日で開催されたため食事の手配も必要になり、7月下旬の「事務日誌」には馬鈴薯ほか芋類・野菜・果物・漬物その他の食料品の調達の様子が記録されていて、当時の食料事情の一端を知ることができます。翌6日には前橋空襲による罹災状況が記されており、図書館・桃井校双方の職員の奮闘によって館舎の延焼を免れたことが赤字で記述されています。なお、さかのぼって3月10日の項には「右空襲ニ依り帝都下町方面ニ大火災ヲ生ジ午前三時頃ニハ其ノ大火災ヲ本市ヨリ望見セラルル状況ナリ」とあり、東京大空襲の現実を伝えています。

県内の図書館で顕著な戦災被害を受けたのは伊勢崎の図書館で、8月14日の空襲により館舎・蔵書が全焼する大被害を被りました。唯一焼け残った書庫を基盤に、戦後の1945年9月より業務が再開され、翌年11月には新館舎も完成しています。



前橋藩松平大和守家記録

プロ野球の父

1931年に読売新聞社の正力松太郎社長がアメリカ・大リーグ選抜チームを招待し、大学野球の実力選手を中心とした日本チームと対戦させ、連日多くの観客を集めました。この対戦の成功が、大リーグの本塁打王だったベーブ・ルースを加えた選抜チームを、3年後に再度招待することにつながります。この時、アメリカチームと対戦するために日本選抜チームが編成され「大日本東京野球倶楽部」と名付けられました。これが東京読売巨人軍の母体で、正力松太郎が「日本プロ野球の父」と呼ばれる理由です。

プロリーグ始動

1934(昭和9)年のアメリカチームと対戦した全日本メンバーの大半がそのまま大日本東京野球倶楽部に残り、翌年にはアメリカに遠征しますが、その間「東京巨人軍」なる名称が生まれ、帰国後正式に認められました。

アメリカ遠征から帰国した東京巨人軍は国内を横断して実業団チームと対戦し、職業野球チーム創設を呼びかけます。翌年には甲子園球場を持つ阪神電気鉄道が名乗りをあげ、著名な実力者を集めて「大坂野球倶楽部」としました。さらには名古屋、セネタース、阪急、大東京、金鯱が生まれ計7球団となって「日本職業野球連盟」（後の「日本野球連盟」）という名称の下、プロリーグが動き出しました。

日本の近代スポーツは明治とともに始まります。

スポーツが日本に移入されたのは西洋文化が急激に入り始めた明治の始め頃で、諸学校に招かれて来日した外国人教師の紹介などによる影響が多かったといわれています。漕艇、サッカー、テニス、野球などが相次いで紹介されました。また、日本には武士の必修科目として行われてきた数百年の歴史を持つ武術もありましたが、それらも近代スポーツとして発展し、年月をかけて人々に理解されるようになりました。今ではスポーツは国や性別、年齢関係なく多くの人に親しまれるようになり、スポーツを通じて人々の胸を打つドラマも多く生まれ、見る人を楽しませています。

日本では昭和に入りスポーツが急速に発展する中、戦時下では精神訓練や体力増強のために、記録よりも鍛錬に重きを置かれたこともありました。その結果、スポーツ選手も戦地に赴き、多くの若い才能が失われた事実もあります。

第1期では、プロ野球・オリンピック・相撲についてそれぞれの起源から終戦までの変遷を紹介します。激動の時代の流れを感じながら、スポーツが担ってきた役割にご注目ください。

日本プロ野球のはじまり

日本と野球

今や国民的スポーツともいえる野球ですが、野球が日本に入ってきたのは明治の始め頃で、全国に広がっていったのは開成学校(現・東京大学)のアメリカ人教師が学生に指導した影響が大きいといわれています。1905(明治38)年に日本初のアメリカ野球遠征を敢行した早大野球部のエース・河野安通志らが1920年に東京・芝浦に本拠地球場をおいて創設した「日本運動協会(通称・芝浦協会)」が日本プロ野球の走りとされています。同時期に大坂毎日新聞社が大毎野球団を設立しましたが、野球を職業にするという観念がまだ薄く、どちらも数年後には解散してしまいます。しかしアマチュア野球は人気があり、東京六大学野球は圧倒的な人気を得ていました。

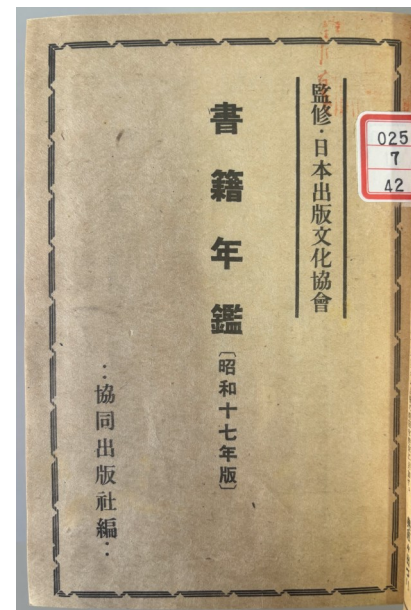
図書閲覧票・封筒 昭和前期頃

図書閲覧票は、利用者が閲覧を希望する図書を記入し、それに従って職員が書庫から出納するために用いられていました。1938(昭和11)年の『前橋市立図書館概覧』によると、当時閲覧は出納式を原則とし、辞書・法令・新着図書・雑誌・新聞・児童書のみが開架されて自由な閲覧が可能でした。閲覧票が廃止された正確な時期は不明ですが、1974(昭和49)年に現館舎が開館した際、一挙に7万冊が利用者の直接手に取れる棚に設置され、閉架式から開架式主流の図書館になった頃から、徐々にその役割を失っていったものと考えられます。

封筒には「群馬県中央図書館」の印字があるため、1943年11月に群馬県中央図書館の指定を受けてから、1951年4月に現行の図書館法が施行されるまでの期間に使用されていたものと考えられます。

書籍年鑑 昭和17年版

協同出版社編集部／編 協同出版社 1942(昭和17)年



前年に出版された書籍の目録を中心に、出版界・出版関係業界の展望やニュース、統計、関係法規など、1941(昭和16)年の出版関係事項を収録した資料。出版目録では、タイトル・著者名・出版社といった基本情報に加え、簡単な解題も付与されています。「図書館界概観」には、1941年の図書館界の動きが記されていて、当時の時局を反映した内容になっています。

戦中の市立図書館活動記録

戦中に行われた活動は、市の事務報告書や学事要覧に記録されています。1941年の事務報告書によると、前年度の蔵書冊数は52,612冊で、「本館開設以来二十五年ヲ閲シテ漸ク蔵書五万ニ達セシモコレヲ本市現住戸数ニ対比スレバ一戸当り三冊ニシテ尚ソノ蔵書少キヲ思ハシム」、閲覧者数は172,897人です。また、1940(昭和20)年の事務報告書には「空襲対策トシテ重要図書ハ夫々疎開ノ上、本館ハ桃井国民学校ノ一部ニ移転、五月一日ヨリ専ら貸出ヲ主トシ開館ス」と図書館の運営状況が報告され、蔵書冊数59,875冊、閲覧者数175,514人とわかります。1916年の創立から1940年までの利用状況を概観すると、蔵書冊数は順調に伸びていますが、利用者数は1927年にはじめて10万人を超えてから1937年の21万人をピークに徐々に減少しています。

新選名著復刻全集近代文学館 第37巻

名著復刻全集編集委員会／編 日本近代文学館 1982(昭和57)年

山本有三は1937年から朝日新聞で「路傍の石」を連載していましたが、登場人物に社会主義的思想を持つ人物がいたため、軍国主義の圧力がかかり連載中止となります。その後、掲載誌を『主婦之友』に変更し、翌年から約2年間「新篇 路傍の石」として連載を続けていましたが、検閲当局の干渉が入り、未完のまま執筆中断となりました。

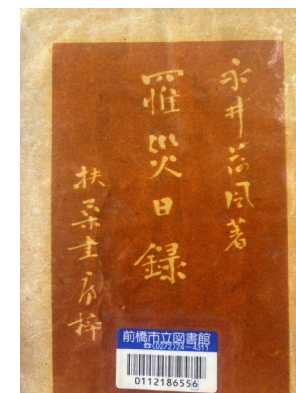
山本有三全集 第9巻 山本有三／著 新潮社 1976(昭和51)年

1947年に単行本として出版された「新篇 路傍の石」のあとがきです。連載中断となった経緯や、当局の検閲について書かれています。

谷崎潤一郎全集 第16巻「疎開日記」

谷崎潤一郎／著 中央公論社 1982(昭和57)年

1944年元日から1945年8月15日までの日記。展示箇所には、8月14日に永井荷風と共に食事をしたこと、翌日荷風を見送った後に玉音放送を聞いた時の様子が記されています。



罹災日録 永井荷風／著 扶桑書房 1947(昭和22)年

荷風の日記「断腸亭日乗」より、1945年分を抜粋したもの。展示している箇所には、谷崎潤一郎と共に牛肉や日本酒を楽しんだ8月14日の出来事が記されています。

徴用されなかった作家たちの活動

戦時下の言論統制と作家への影響

作家たちの徴用が拡大する一方で、徴用を受けなかった作家はそれぞれの状況に応じて文学活動をしていました。当時の日本は政府の力が強く、作品や態度を通して抵抗していたと考えられる作家はいますが、表立って戦争に反対する運動を行うことは難しい状況でした。1939(昭和14)年頃から言論及び出版統制が強化された影響で、それ以前に出版されていた図書に対する発禁処分や、山本有三の「新篇 路傍の石」、徳田秋声の「縮図」など、新聞・雑誌等に掲載していた連載の中止が相次ぎました。

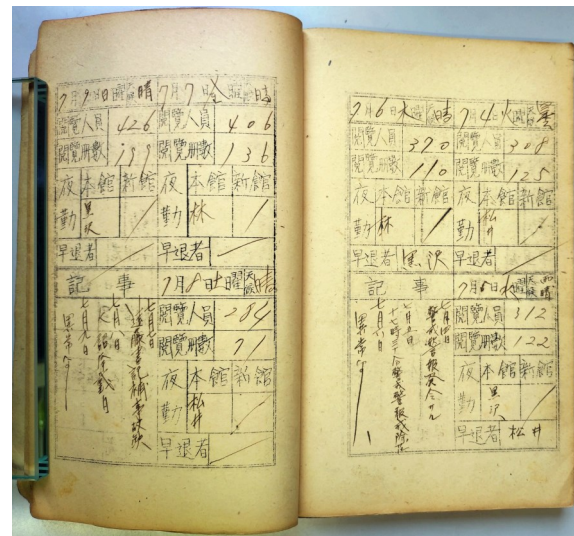
執筆を続けた作家たち

作品未完のまま筆を置いた作家がいる一方で、密かに執筆を続けていた作家もいました。谷崎潤一郎は1943年1月から『細雪』を『中央公論』で連載していましたが、検閲当局の弾圧により2回で打ち切りとなります。しかし、谷崎はその後も細雪を執筆し続け、終戦後の1946年に作品は出版されました。終戦間近に岡山県勝山町(現在の真庭市)に疎開していた谷崎は、同時期に岡山市へ疎開していた永井荷風と行動を共にしています。終戦の前々日から3日間を共に過ごした様子は、谷崎の『疎開日記』と荷風の『断腸亭日乗』に記されています。『断腸亭日乗』は、荷風が1917年9月16日から亡くなる前日の1959(昭和34)年4月29日まで書き続けていた日記で、東京で住んでいたアパートが空襲で全壊した様子や、疎開先である岡山の風景や人々、疎開した17日後に起きた岡山大空襲の様子などが記されており、当時の日常生活には常に戦争の影があったことがうかがえます。

秋声全集 第13巻「縮図」
徳田秋声／著 雪華社 1961(昭和36)年

著者が都新聞(現在の東京新聞)に連載していた作品です。連載開始前の予告では「時代の許す範囲で自由に書きたい」と語っていましたが、内閣情報局の干渉が入り、第80回の掲載を最後に連載中断となりました。未完のまま秋声は亡くなり、2回分の原稿を加えて没後に出版されています。

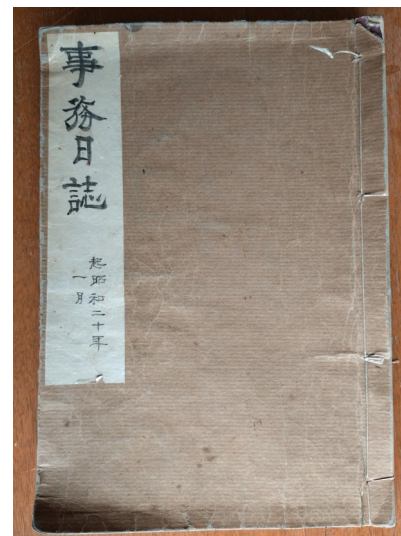
前橋市立図書館日誌 昭和18年度 1943(昭和18)ー1944(昭和19)年



館員による図書館日誌。毎日の閲覧者数、閲覧冊数が記録されています。1944(昭和19)年7月4日の記事には、「警戒警報発令サル」、翌5日には「十七時三十分警戒警報戒除サル」とあります。警戒警報は防空警報の第一段階にあたり、敵機来襲のおそれのある場合に発令されました。さらに空襲が間近に迫った場合に発令されたのが、空襲警報です。

事務日誌

渋谷国忠／著 1945(昭和20)年



1945年1月1日より1947年2月5日までの図書館事務について、当時の館長・渋谷国忠が記録した日誌。展示の箇所は1945年8月6日、前橋空襲の翌日にその被害状況について綴った部分です。翌7日の項には、早くも図書館が開館したこと、女子職員は当分戦災援護活動に従事することが記されています。また空襲により図書を焼失した場合、罹災証明を所持していれば弁償を免除する措置をとったこともわかりますが、このような災害時の臨時処置は現代においても行われています。

そのほか、戦争末期でも通常の閲覧業務をはじめ群馬県の中央図書館としての事業を継続していたこと、桃井国民学校(現・前橋市立桃井小学校)移転後に校庭で甘藷を栽培していたことなど、当時の状況が克明に記録されています。

明治20年代頃、日本では『スバル』『明星』などの文芸雑誌が発行されるようになりました。群馬県では山村暮鳥や大手拓次、前橋では萩原朔太郎、平井晩村、萩原恭次郎など、個性豊かな詩人たちが活動していました。当時活躍した詩人たちは集団で活動し、活発な動きをみせていたため、前橋は「近代詩のふるさと」と呼ばれています。

その後、昭和を迎えると、生活には次第に戦争が大きく影響し始め、文学の世界にも様々な部分でその色が濃くなっていきます。詩人をはじめとした多くの作家がその影響を受け、作品や制作過程にも見られ始めます。

ここでは、昭和の前橋にゆかりのある詩人たちと、作家と戦争の関係性を紹介します。前橋が「近代詩のふるさと」と呼ばれる所以にもなった詩人たちの活躍と、時代の影響を受けながら創作活動に励んだ作家たちにご注目ください。

近代詩のふるさとまえばし

草野心平

詩人。1903(明治36)年、福島県生まれ。生涯にわたって蛙を題材にした詩を書き続けたため、「蛙の詩人」と呼ばれています。

草野は、1928年の夏から1930年の晩秋まで前橋に住んでいました。神明町で困窮を極めた生活をしながらも、伊藤信吉とともに、多くの詩人たちが交流する場となった雑誌『学校』を創刊します。さらに、第一詩集である『第百階級』も前橋在住時に出版しました。1929年に、上毛新聞で校正係としての勤務が始まり、住居を紅雲町へと移します。この頃、帰郷した萩原朔太郎と出会い、朔太郎の詩集について上毛新聞に書評を執筆したことをきっかけに、喫茶店を訪ねて将棋を指すなど親交を深めました。

草野が前橋に住んでいたのは2年半ほどでしたが、当館に事務局を置いていた萩原朔太郎研究会の会員だったこともあり、その後も前橋を訪れています。1972(昭和47)年の朔太郎忌の行事において、「僕は福島県が生れ故郷であります、前橋を中心にした上州は第二の故郷だと思っています。」と語っており、強い思い入れがあったことがうかがえます。

草野心平「わが青春の記」

草野心平／著 日本図書センター 2004(平成16)年

著者が自身の半生を回顧して執筆した自伝です。前橋に住むことになった経緯や前橋での生活について記されています。

一方で、占領が成功し都市名を昭南市と改称したシンガポールでは、宣伝班の活動が比較的活発に続きました。このときシンガポールに派遣されていた井伏鱒二は、昭南タイムズという日刊英字新聞の発行をはじめ、日本語学校である昭南日本学園で教壇に立つなど、教育活動に従事しました。さらに、大本営※7から依頼を受け、昭南市の少年家族と宣伝班員が交流する様子を描いた作品『花の町』を執筆しています。井伏は徴用作家となって戦地に赴いても、冷静な視点を失うことなく、日常を見つめて作品を描き続けました。

※7 大本営：日本軍の最高統帥機関。

現代文学大系48「生きてゐる兵隊」

筑摩書房 1964(昭和39)年

日中戦争時自ら志願して特派員となった石川達三が現地の兵士に取材して執筆した作品で、日本軍の非道な行為や悲惨な戦闘の様子がリアルに綴られています。この作品は国民に誤った戦争観を植え付けるとされ、掲載していた中央公論は発禁処分となり、さらに著者と編集者、出版関係者が有罪判決を受けるという筆禍事件となりました。

現代日本文学全集48「麦と兵隊」

筑摩書房 1955(昭和30)年

火野葦平が兵士として日中戦争に従軍していた体験をもとに執筆した作品です。日記形式の作品で戦闘の描写も含まれていますが、主に兵士同士の交流や現地での生活など、戦闘以外の様子が丁寧に描かれています。

井伏鱒二全集 第3巻「花の町」

井伏鱒二／著 筑摩書房 1964(昭和39)年

この作品は、著者が南方徴用作家として従軍していた際に、大本営の依頼を受けて執筆されました。直接的な戦争の描写ではなく、占領下のシンガポールにおける日常の様子が描かれています。作中には、著者が関与していた事業である昭南日本学園や昭南タイムズといった名称が確認できます。

戦争に徴用された作家たちの活動

日中戦争期

1937年の日中戦争勃発を機に、それまでほとんど戦争に関して言及してこなかった『中央公論』や『文芸春秋』などの総合雑誌が支那事変の特集号を発行し始めます。さらに、三好達治や尾崎士郎らが特派員として現地に派遣され、従軍作家となります。彼らは激戦が終わった地域に派遣されることが多く、雑誌には主に紀行文のような現地報告が掲載されました。中には、自ら志願し特派員になった石川達三が現地の兵士に取材して執筆した『生きてゐる兵隊』のような異色の作品もありました。

1938年になると、内閣情報部※⁵が日中戦争の戦いの一つである武漢作戦に作家を従軍させる計画を発表し、ペン部隊と呼ばれる従軍作家部隊が結成されます。菊池寛、林芙美子、久米正雄ら22人が参加したペン部隊は、実際に陸軍と海軍に分かれて軍事作戦に参加したため、それまでの作品よりもリアルな従軍体験記が執筆されました。この当時は、フィクション作品よりも事実に基づくルポルタージュが高く評価されており、兵士として従軍していた火野葦平(ひのあしへい)が執筆した『麦と兵隊』が出版されると、100万部を超えるベストセラーとなりました。

※5 内閣情報部：国策遂行のための広報や出版統制などを目的として設立された、内閣直属の機関。

太平洋戦争期

徐々に文学の世界も戦争の影響を受け始める中、1941年に太平洋戦争が勃発します。政府は新しい作戦として、芸術家や報道陣などで構成し、占領地域の住民や日本国内への宣伝報道を任務とする宣伝班を編成しました。宣伝班員は南方作戦で進軍する各方面の部隊及び海軍に配置され、白紙と呼ばれる徴用令状で招集されました。井伏鱒二、高見順らが南方徴用作家として派遣され、戦いに参加し、占領後は現地で新聞の発行や日本語教育などを手掛けました。この宣伝班には明確な方針が示されていなかったため、大半の作家は十分な活動を行うことなく任務解除となりました。

群馬文学全集 第16巻

伊藤信吉／監修 群馬県立土屋文明記念文学館 2000(平成12)年

草野が前橋を題材にして創作した詩。展示している「訪問」「無題」「前橋紅雲町五十六番地の一角」の詩中には、赤城嵐(おろし)や龍海院といった、前橋の人々にとって馴染み深い言葉が使われています。

伊藤信吉

詩人。1906(明治39)年に元総社村(現在の前橋市元総社町)の養蚕農家に生まれました。群馬県庁の職員として勤務する傍ら、同人誌や上毛新聞に詩の投稿を行い、当館の蔵書にあった萩原朔太郎の『月に吠える』を読んで感銘を受け、本格的に文学の道を志します。1929年に上京すると、ナップ※⁴の構成団体の一つである日本プロレタリア作家同盟に加入し、プロレタリア詩人としての活動を始めました。しかし、1928年から治安維持法が強化され、政府への反体制運動に対する弾圧が強まっていた影響で、1932年6月に治安維持法違反の疑いで逮捕されます。

釈放され帰郷してからは、長らく詩作を絶ち、土地の民話や方言・わらべうたなどの採集に尽力しました。また、生涯の師として師事した萩原朔太郎や室生犀星をはじめ、数多くの作家たちと交流していたため、作家研究や文芸評論なども執筆しています。さらに、1996(平成8)年からは土屋文明記念文学館の館長を務めるなど、生涯にわたり幅広い活動に携わっていました。

※4 ナップ：全日本無産者芸術団体協議会。プロレタリア文学の機関紙『戦旗』の発行などを行っていた。

伊藤信吉著作集 第7巻「故郷」

伊藤信吉／著 沖積舎 2003(平成15)年

展示している箇所は、詩集『故郷』に収録されている詩「故郷」の一部です。1931(昭和6)年の詩で、この詩集には伊藤がプロレタリア詩人として活動していた際の詩24編が収録されています。伊藤は治安維持法違反の疑いで逮捕された経験があり、『故郷』の出版後長らく詩作を絶っていました。

前橋ゆかりの詩人と戦争

太平洋戦争の開戦を機に、多くの詩人たちは戦地へ向かう人々を鼓舞するような戦争賛美の詩を発表するようになります。伊藤信吉は自身の著書である『室生犀星』の中で、「私は戦争詩の〈代表的〉ともいうべき詩人として、高村光太郎、室生犀星、三好達治の三人を同時的に思い浮かべる」と語っています。ここで名前の挙がる3人は萩原朔太郎及び前橋と関係が深かった人物でもありました。

高村光太郎

高村光太郎は、前橋出身の彫刻家・細谷而楽と東京美術学校(現在の東京芸術大学)時代の同期で、親しく交流をしていました。また、朔太郎が光太郎のアトリエを訪問したこともあります。光太郎は、1941年に智恵子夫人の葬儀についての詩「荒涼たる帰宅」を作成した後、戦争詩の創作へと歩みを進めました。さらに、太平洋戦争期に結成された日本文学報国会と呼ばれる文芸団体において詩部門の会長を務めており、戦後には戦争責任を追及されることとなります。朔太郎の没後、伊藤信吉とともに『萩原朔太郎全集』の編集に携わりました。

室生犀星

室生犀星は北原白秋主宰の雑誌投稿をきっかけに朔太郎と出会い、生涯の親友となります。著書「神国」には、毎日ラジオで朗読される愛国詩が、数多くの詩人たちの努力によって創作されているという記述があり、国家総動員体制の影響が創作活動にまで及んでいたことがうかがえます。この当時、ラジオ放送だけでなく新聞にも戦争協力詩が掲載され、中には都市の占領予定日に掲載できるよう新聞社から依頼を受けて作られた詩もありました。朝日新聞には、犀星がシンガポール陥落予定日のために創作した詩も掲載されています。

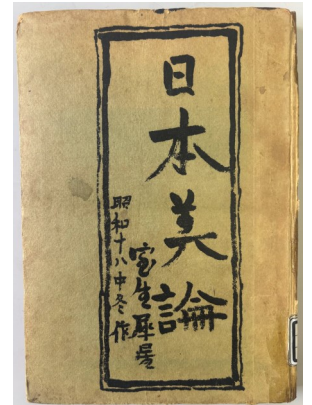
三好達治

三好達治は、朔太郎を生涯の師と仰ぎ、朔太郎の没後、伊藤信吉とともに『萩原朔太郎全集』の編集に携わりました。達治は日中戦争の際に雑誌特派員として上海に渡りルポルタージュを執筆しているほか、90編を超える戦争詩を残しています。

日本美論

室生犀星／著 昭森社 1943(昭和18)年

室生犀星が手掛けた戦争詩集のひとつです。この詩集には、戦地へ向かう人々を鼓舞するような作品だけでなく、戦時下の日常を生きる人々の視点から綴られたような詩も含まれています。



萩原朔太郎

日中戦争期には萩原朔太郎も戦争協力詩を創作しています。日本軍が中華民国の首都・南京を占領したとされる1937年12月13日の東京朝日新聞に、「南京陥落の日に」というタイトルの詩が掲載されました。この詩について、朔太郎が丸山薫※5宛に送った書簡に「朝日新聞の津村氏に電話で強制的に頼まれ、気が弱くて断り切れず、とうとう大へんな物を引き受けてしまった。」との記述があり、朔太郎が自主的に作ろうとして創作した詩ではないことが分かります。朔太郎が生涯で手掛けた戦争協力詩はこの1編のみでした。

※5 丸山薫：詩人。1899年、大分県大分市生まれ。晩年の朔太郎と親しく交流した。

群馬文学全集 第5巻「南京陥落の日に」
伊藤信吉／監修 群馬県立土屋文明記念文学館 1999(平成11)年

朔太郎が創作した唯一の戦争協力詩。1937年12月13日の東京朝日新聞に掲載されました。丸山薫宛の書簡に、この詩は東京朝日新聞に頼まれて創作したと書かれています。

萩原朔太郎全集 第13巻

萩原朔太郎／著 筑摩書房 1977(昭和52)年

朔太郎が自身で創作した詩「南京陥落の日に」について丸山薫宛に書いた書簡。朔太郎は戦争協力に加担するような詩を創作することを快く思っていなかったようで、文中では戦時中に多くの軍歌を作詞していた西城八十と、戦争詩を書いていた神保光太郎の2人に苦言を呈しています。